常照
第８１３号

お彼岸ですね

先日、うちのお寺のご門徒さんが「お盆が終わったらすぐ秋のお彼岸だもんね、やっぱりまた墓参りしなきゃいけないのかね。ウチは納骨堂だからいいけどさ。お経もまたもらった方がいいのかい？」と尋ねてこられました。読経してもらうとまたお布施が…と思われたかどうかは定かではありませんが。そこで『暑さ寒さも彼岸までって言うでしょ。一番良い時節ですから、墓参りや納骨堂もそうですが、どうぞお寺の法要にお参りに来てご法座の席にも座ってください』と案内しました。

ところでお彼岸というのは当然のごとく仏教行事と考えられていますが、もともと仏教に彼岸という行事はなかったそうです。インドにも中国にも彼岸という仏事は存在しておらず、これは日本独自の不思議な行事なのだとか。秋のお彼岸といえば秋分の日を中心に前後三日づつ計一週間。インターネットなんかで調べるとお彼岸は仏教週間ですと表現されていました。〇〇週間といいますと動物愛護週間や、読書週間と同じような用例であります。行政だかどこだかの団体がこの期間に活動を推進・啓発し参加を求めるという主旨で

ありましょう。

ちなみに日本には昭和二十三年に制定された祝日法という法律があります。秋分の日は【祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ】と明記されています。だったら春のお彼岸はどうなんだと調べてみますと。春分の日は【自然をたたえ、生物をいつくしむ】とありました。国の定める秋分の日あるいは春分の日の定義とはこういう日であります。前述の仏教週間という表現を合わせると、そういえばお彼岸はお寺でも永代経の法要が勤まる時期でもあります。それだけ日本国民の暮らしに密接しているのだなと思います。

では、みなさんはお彼岸の中日にあたる春分の日・秋分の日は何をしますか？

この岸・かの岸

実は「彼岸」と言う単語自体は季節を表す言葉ではなく、文字通り彼の岸＝向こう岸を表す仏教用語です。到彼岸とも言い、向こう岸に到るという意味で使われています。私たちの住む世界は、此の岸「此岸（しがん）」であります。こちらの岸が迷いの世界、あちらの岸が悟りの世界です。迷いの世界から、悟りの世界へと到るのが仏道であります。しかし此岸から彼岸へわたるとすれば相当の努力が必要となります。向こう岸が見えないほどの川を渡る、そのために戒律を守り雑念や煩悩を退け修行をするのです。そうして修行を完成させた暁には仏の岸＝悟りに

到達するというわけであります。ですからみなさん、彼岸の一週間というのは集中的に修行する期間でありますから、この期間はみんなで修行に励みましょう。

自力は無功

前述で申しあげたとおり、普通は向こう岸へ渡ろうと思ったら血のにじむような努力しなければならないのです。

ところが親鸞聖人は、わが身をたのみ、わがはからひのこころをもって励んだ仏道修業を自力と呼んで、自力によって得た力では浄土へ往生すること、仏になることはできないと仰るのです。

では、自力（自分の努力や能力）があてにならないならばどうすればよいのか。自力が駄目なら他力です。しかし他力といっても他人まかせにすること、他人の力をあてにすることではありません。親鸞聖人は**他力というは、如来の本願力なり**とはっきりとお示しくださってます。他力というのは阿弥陀さまの本願の力＝はたらきであると。生きとし生けるものを必ず仏にしようという願いとはたらき、お慈悲であります。この阿弥陀仏の本願をよりどころにする、あるいは阿弥陀さまのはたらきにおまかせするのです。では具体的にまかせるとはどうすることでしょうか？

南無阿彌陀佛

親鸞聖人は南無阿弥陀仏の六字

は、阿弥陀さまの呼び声だと仰っています。何と呼びかけておられるかというと、私たちに向かって『あなたを必ず救って悟りの浄土へ生まれさせるから安心しなさい、まかせなさい』とよびかけているのだと。ならば私達はわかりましたと頷いて、南無阿弥陀仏とお念仏するのみであります。

そして、「なぜ阿弥陀さまは呼びかけているんだろう。なぜ、私たちを救おうと考えたのだろう？」この事を聞かせていただくのが、ご法座であります。ですから彼岸にすることといえば、普段と同じく聞法をとおして阿弥陀さまのおこころ、到彼岸の救いを聞かせていただくことです。そのことを一番喜び、伝えてくださる方が祖先です。

十月の常例布教（ご法話）のご案内

《宗祖親鸞聖人報恩講》

○期　日　十月十三日（水）逮夜～
　　十六日（土）満日中まで

○日　程　晨　朝　午前六時三十分
　　日　中　午前十時
　　逮　夜　午後一時三十分
　　（逮夜引き続き）初夜

○報恩講布教　右記の法要に引き続き
　　滋賀教区甲賀組　報恩寺
　　講師　九條　孝義　師

○場　所　小樽別院本堂

◎なお、十月十三日より十七日まで報恩講修行に伴い月忌参詣をお休みさせていただきます。どうぞ報恩講にお参りください。席の間隔を保ち換気実施の上、お待ちしております。

発行所
〒047-0017
小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
電話（〇一三四）二二一〇七四四番
FAX　二九一四〇八〇番
テレホン法話　二七一一六一六番